

# 荒木貞夫と陸軍省新聞班制作トーカー「三月十日」

林 美 和

はじめに

日本において初めて戦争記録映画が撮影されたのは明治三十三年（一九〇〇）、義和団事件のときである。アメリカ（米西戦争）やイギリス（英杜戦争）の影響を受け、日本軍に従軍撮影班が同行したのが始まりであるといわれている。その後、日露戦争・第一次世界大戦・シベリア出兵の際にも戦争記録映画の撮影を行うようになるが、これは新聞社がニュース映画の制作を企図して撮影したものであり、あくまでも不定期に制作されたものであった。この時期、映画制作の主体は新聞社・通信社等のマスメディア側にあり、民間制作の映画に対して陸軍省は「推薦」という形での後援を行うだけに過ぎなかった。

しかし、昭和六年（一九三一）の満州事変をきっかけに軍事映画の数が種類が急増する。その翌年に制作された軍事映画（満州事変もの、上海事変の「爆弾三勇士」もの等）だけでも約四十本あり、種類はニュース映画・劇映画・教育映画等の多岐にわたる。しかし、これらの映画制作は、あくまでも民間制作の範囲内であった。

国民の戦争熱・排外熱の盛り上がりとともに、軍事映画は人気を博し、

国民生活のなかに広く浸透していった。このような社会情勢を鑑み、陸軍省は自らが企画した軍事映画の制作に乗り出す。そこで本稿では、陸軍省新聞班が企画・制作した初のトーカー「三月十日」の制作背景、および台本内容について解析することで、当時の陸軍が企図していた「国論」の操作、国防思想の普及過程について検討していくことにする。そして、満州事変期の陸軍が世論指導を重要視した政治的背景についても言及したい。

## 一 陸軍「荒木主導体制」の誕生

### （一）陸軍省新聞班について

陸軍の広報活動を任務とした部署である陸軍省新聞班（以下、新聞班と略記）について説明する。新聞班は大正八年（一九一九）五月に既存の「新聞係」を拡張する形で組織された部署である。これは当時の陸軍大臣田中義一の意図によるものであり、田中が新聞班の設置を企図した最大の理由は、大正七年（一九一八）のシベリア出兵で噴出した国民世論の反発

を抑えるためであった。<sup>1)</sup>

新聞班の初代班長は秦真次中佐、発足当時の班員は五名（香椎浩平中佐ら）という少数精鋭の部署として発足している。初代班長の秦は、のちの荒木貞夫陸相就任時の憲兵司令官であり、香椎は二・二六事件のときの憲兵司令官である。新聞班は官制外組織として位置づけられ、官規上では編制表には存在していないことになっている。その理由としては、予算面（機密費）の問題、陸軍省内における新聞班に対する反発もあつたためと考えられる。のちに新聞班は陸軍省情報部、情報局へと発展し、陸軍に対する世論指導を牽引する役割を担うことになる。

陸軍は満蒙問題の解決には国民の支持が不可欠であると考えており、参謀本部の「満洲問題解決方策の大綱」（一九三一年）においても世論指導の重要性を説いている。満州事変勃発後、事変を正当化すべく国民の支持を是が非でも獲得する必要がある、そのスポークスマンとして白羽の矢が立ったのが荒木貞夫である。次項では、陸軍による世論指導の立役者となつた荒木について触れていくことにする。

## （二）荒木貞夫の陸軍大臣就任

荒木は明治十年（一八七七）、東京において、旧一橋家家臣であり小学校長を務めていた荒木貞之助の長男として生まれ、明治二十九年（一八九六）に陸軍士官学校（九期）へ入学した。同期生には本庄繁、真崎甚三郎などがいる。翌年に陸軍士官学校を卒業した荒木は少尉に任官され、近衛師団歩兵第一連隊附となる。明治三十七年（一九〇四）、日露戦争に出征し、その後は参謀本部ロシア班出仕、ロシア駐在武官を歴任するなど、陸軍の「ロシア通」として荒木は要職を歴任していくことになる。とくに荒

木の思想を左右する出来事となつたのは、大正七年（一九一八）に浦塩派遣軍参謀として従軍したシベリア出兵であつた。軍紀の退廃、共産主義思想の猛烈な勢いを目の当たりにした荒木にとって、この経験は彼の対ソ戦観に大きな影響を与えることになる。

昭和六年（一九三一）十二月、第二次若槻内閣は閣内の意見不一致により総辞職を余儀なくされ、代わつて立憲政友会の総裁である犬養毅に大命が下つた。それに伴い、南次郎陸相は辞任し、荒木貞夫が新たな陸軍大臣として就任した。

就任当時の荒木の評判はすこぶる高く、陸軍全体の総意として陸軍大臣に迎えられる。荒木の陸軍大臣就任の背景には、軍縮や三月事件により反発を買つていた宇垣一成の影響力を阻止したいという思惑も存在していた。とくに青年将校たちからの人気が高く、演説が巧みであつたため、軍部の中核を担う陸軍中堅幕僚たちは荒木がもつカリスマ性、話術の巧妙さに期待を寄せていた。

陸軍の「総意」として陸軍大臣に迎えられる荒木であつたが、彼が適任であると判断された理由として、個人的な政治的野心を抱いていなかったことが挙げられる。これは、立憲民政党と癒着関係にあつた宇垣に対する陸軍内の反発心の現れともいえる。政党に媚びない、政党内閣や政党と渡り合える陸軍大臣として、荒木は期待された。また、荒木が唱える教育論や思想的発言が陸軍内において一定の評価を得ていたこともその理由として挙げられよう。荒木は陸軍内において軍隊教育の重要性を唱えており、陸軍大学校長という役職に選ばれるなど、教育者としての見識が豊かな人物として認識されていた。また荒木の哲学的な物言いと日本精神を鼓舞する思想は、こののち、陸軍主導で行われた天皇崇拜

による人心の統合のメルクマールとしての役割を果たすことになる。

荒木が昭和六年（一九三二）六月に熊本第六師団長から教育總監本部長へと転任した背景について、ある新聞記者は「荒木が次の侍従武官長という話が持ち上がった」<sup>2</sup>おり、彼が天皇の側近候補に挙がっていると風評していた。<sup>2</sup>荒木に対する期待感は陸軍内外にも存在していたが、一方では、元老西園寺公望の側近であった原田熊雄のように「荒木中将は、自分も懇意にしてゐる人だけでも、非常な平沼男崇拜者で、「国本社」の顕著な名士である。かくの如き人が側近に奉仕することは見方によれば重大事で、非常な危険をも感じられた」<sup>3</sup>と懸念を表す者も存在していた。荒木は国本社のメンバーであり、自身が陸大校長だった頃に国本社の学生幹事を置くなど、積極的に活動をしてきた経緯がある。枢密院副議長で国本社の顧問を務める平沼騏一郎の影響力を嫌う宮中は、平沼と新しい荒木の侍従武官長就任に対して危機感を抱いていたことが理解できさる。

しかし、昭和六年（一九三二）に十月事件（陸軍中堅将校等が企図した未遂クーデター）が発覚した際に荒木がとった行動により、原田の荒木に対する評価に変化が生じる。

荒木中将の所でいろいろ話をきいてみると、軍部の今度の事件といふものは、何等具体的な事実はなかつたとのことであつた。若い連中がより酒を飲んで相談をし、憤慨もしてゐるといふこともきいたので、荒木中将は、十六日の晩に、橋本始め参謀本部員その他の連中が飲んでゐるといふ某所に行つて、「さうまあ、こんなに酔ひながらいろいろなことを言つたところで、話ができるもんぢやな

い。のみならず、いつも言ふやうに、乱暴なことをしたり無考へなことをやるのは慎まなければならん。日本の将校といふものは謂はば草薙剣であつて、草薙剣は始終研いでおかなければいかん。さうやたらに抜くべきものぢやあない。一体どうもこんな所に自分が軍服を着て来て、貴様達が酒を飲んでゐる前でこんなことを話すなにか思ひもよらん話である。もう少し慎まなければならん。」といふやうな話をして、帰つて来たさうだ。<sup>5</sup>

荒木の毅然とした対応を伝へ聞いた宮中は、陸軍を統制する能力をもつた人物として荒木を認識し、徐々にではあるが信頼を寄せるようになる。元老の秘書から一定の信用を得たことは、荒木にとってプラスに作用した。荒木の陸軍大臣就任は、このような過程を経て、舞台が用意された。

昭和六年（一九三二）十二月に犬養内閣が組閣されると、荒木は陸軍大臣に就任し、陸軍の新たな時代の象徴として、その任務に当たることになる。しかし、荒木陸相の就任には、依然として前述したような「平沼の影響力」を懸念する声がささやかれた。にもかかわらず、荒木が陸軍大臣に就任した政治的背景には、当時の内閣に次のような事情が存在していたことが影響している。

荒木中将を陸軍大臣にすることについては、犬養総理も非常に考へたらしい。それといふのは、組閣の場合に前内閣のいろいろな事情に鑑みて、問題の人を閣僚に入れないといふことにしたからで、殊に今回の政変の原因があたかも陰謀的であるかの如く、即ち久

原と安達の陰謀によつて出来た、といふ風に考へられがちなこの場合として、久原を閣僚に列するが如きは絶対にはけなければならぬといふことと思ひ、その通り実行したので。(中略)久原が出て悪戯をするとなれば、青年将校を煽<sup>おだ</sup>てたりなにかする危険がある。そこで若い連中に最も受けのよい荒木中将を閣僚に入れておけば、何らかの場合調節をとるに寧ろ都合がよからうといふ風に考へて、荒木、阿部両中将の中から前者を選出したわけだ。<sup>6</sup>

前内閣である第二次若槻内閣は閣内不一致を理由に退陣したが、その要因として政友会幹事長である久原房之助の策動があつた。その久原が、青年将校を刺激して煽動せぬように牽制すべく、青年将校に人気のある荒木に白羽の矢が立つたのである。陸軍大臣には荒木と阿部信行が推薦されたが、以上のような政治的背景を理由に、犬養首相は荒木を陸軍大臣として選んだ。犬養は阿部よりも、陸軍内を統制できる力をもつた荒木のほうが適任と判断したのである。

荒木の陸軍大臣就任の背景には、陸軍内の統制という意味合いのほかにも、内閣・宮中といった陸軍周辺の政治勢力が抱える諸事情が多分に影響を与えていた。陸軍の「総意」、且つ政府と宮中による一定の信頼感を得て陸軍大臣に就任した荒木に対し、元老西園寺は「荒木といふ人は非常に能弁な人で、話すこともちやんと筋が立つてゐる。勿論その『筋』といふのは、彼の意見としての筋で、多少ユートピアのやうなところもあるけれども、実によく話す人だ。」と評しており、危うさを感じつつも、荒木の一番の持ち味である雄弁な語り口調は元老に強い印象を与えたことが理解できよう。荒木の話術とカリスマ性を武器に、陸軍は国民に対

して満州事変を契機とした「変革」をアピールしていかうとするのである。

## 二 陸軍による世論指導

(一) 荒木陸相が国民に発信した言説

満州事変を契機に高まつた国民の排外熱、陸軍を後押しする国民世論を支持基盤に、荒木は陸軍大臣に就任した。陸軍中央は陸軍大臣荒木貞夫、参謀次長真崎甚三郎を軸とした「荒木主導体制」によつて運営されることになる。

荒木が陸軍の中核に据えられたことにより、陸軍は国民を対象とした世論指導とその操作に本腰を入れていくことになる。ここで、荒木が国民に向けて発信した言説を分析することで、荒木の思想の底流にあるものは何なのか、さらには荒木が政治的および社会的影響を受けながら言説を変容させていく過程について明らかにしていく。

荒木は陸軍大学校長を務めたのち、第六師団長時代(一九二九～三一年)にいくつかの教育資料をまとめている。昭和五年(一九三〇)四月に書かれた資料「皇軍意識の透徹に就て」の冒頭において、次のような記述がある。

身を軍務に致して日本精神を宣揚するを旨とする我皇軍の一員たる以上苟めにも不注意によりて身体を毀傷するは不忠の端であり私情や私欲の為に自ら身を破るか如きは大不忠の極みである。軍服を着、五条の聖論を胸に秘めて天晴の軍人 皇軍の一人と自覚する時に聊にても不純の考か湧いてはならぬ。宏猷を扶翼し奉るべき神聖

なる気分 陛下の大御心に副ふべき崇高なる気魄を充実せしめねはならぬ。之即ち常時服膺し居る所の 皇軍意識である。<sup>8)</sup>

軍服を身に着けた時点で、「皇軍意識」を自覚し、「不純の考」をもつてはならないという荒木の思想がこの文言に現れているが、これはあくまでも軍人に限定した考えである。軍隊内における軍紀の退廃に対し、意見を呈したと思われるが、この時点ではあくまでも軍人の意識変革を求めただけで、日本国民の意識変革にまでは言及していなかった。軍紀退廃問題はこの時期の陸軍の懸念案件の一つであり、陸軍の軍紀退廃に不満を抱いた青年将校がのちに国家改造運動に参加していく動機にもつながった。<sup>9)</sup>一九二〇年代の陸軍士官学校は「腐った空気」が蔓延しており、荒木もこの時期に陸軍大学校長として、軍紀退廃問題に直面した一人である。さらに荒木は次のように述べている。

軍服を着用したまゝ、窃盗を働く不屈者がある。更には兵営内に於て公明を欠く行為の噂か跡を絶ない。加之最近痴情やら私心やらによる情死変死かしかも軍服着用の儘果ては軍器まで使用して為したもののまてあつたのは誠に申訳なき事にて延いては師団の面目にも関はる。兼々聞き居る通り戦場に於てのみ働く事か忠節でない 皇軍の真の面目でもない。常住坐臥日本人儀表となり一世の仰慕に値する様でなくてはならぬ。不純の血に兵器や軍服を汚し又大切なる生命を私情に亡ふか如きは 皇軍の精神を潰すものである。而して大不忠の行為である。去り行くものには已むべからざる事情はありつらん。思ひ詰めたる事にてもあらん。其跡には誠に一掬の涙に誘はるゝ

点はあらんも大義には換え難し。断し而再び斯様な不心得の為に永く汚名を残す様な事を期さねはならぬ。兵営は神聖なる道場である。 皇国軍人は日本道を世界に宣揚すべき聖戦の士である。軍服は其表象であり兵器は其破邪の力である。仮りに兵営に於て薄弱なる思想を持ち又は公明なる精神を欠き或は軍服を着用しなから威容を紊し貧汚の考を起し又は少しにても私情の為に其身を毀つ様の事あつてはならぬ。断してあつてはならぬ。 皇軍意識の透徹とは即ち第一に之等の事より始まるのである。 皇軍意識か透徹し志気か振ふ時此魔風は影を没し平戦両時を通して真個の 皇軍の面目を發揮し得るのである。<sup>10)</sup>

ここで荒木が強調するのは、軍人は「戦場に於てのみ働く事か忠節でない」ということである。陸軍内に蔓延する「腐った空気」は、軍人の日常生活の乱れを招き、利己的な思考へと導いた。荒木は軍人の意識向上の手段として「皇軍」というキーワードを用いた。天皇に奉じる身分としての軍人、しかもそれは軍服という表象に現れているのだという。荒木は利己的でバラバラな軍隊秩序を、天皇を奉じることで意識を統率し、軍服という視角的にも理解しやすいアイテムで意識の使い分けを企図したものと思われる。そして、軍人は「天皇を奉じる」「軍服を身に着ける」という単純な定義を作ることによって、軍隊意識を平準化させることを狙ったと考えられるのである。

そして荒木は、満州事変の勃発と自身の陸軍大臣就任を境として、さらに一般の国民に対しても意識の平準化を図ろうとする。荒木が昭和七年（一九三二）七月に靖国神社奉納ラジオ体操の会で行った挨拶の内容

を紹介しよう。

就中此のラジオ体操を通じ、壹百万といふ沢山の方々が、能く調子を揃へ拳動を同ふし、一糸紊れず所謂万人の心を以て一人の心と為し、□絡一員、衆心一致、以て毎朝繰り返し繰り返し体操を行ふといふことは、我々国体の君民一体そのもの、精神を明かに示して居るものでありまして、これこそ我が国民精神の精華であると申しても差支へないことである。<sup>11)</sup>

百万人もの人間が同じ時間に同じ体操を行うことによつて心を一つにすることは、君民一体の精神にもつながるのだと荒木は述べており、民衆の意識も「天皇を奉じる」「皆同じ動作を行う」という単純な定義を作ることによつて、平準化する意図が感じられる。のちの話であるが、昭和十五年（一九四〇）の国民服制定などもその一例である。

荒木が掲げた「皇軍」というキーワードは、満州事変以前は範圍が軍人に限定されていたものの、満州事変以後は範圍が拡大され、一般国民にまで及んでいく。そして、国民の日常生活にまで浸透し、影響を及ぼしていくことになるのである。

次に、荒木の対外認識について考察する。荒木が「満洲国地図」が公刊された際に寄稿した文章を紹介しよう。

世界ニ率先シテ大満洲国ノ独立ヲ承認シ更ニ國際連盟ノ離脱ヲ敢行シテ皇国日本ノ決意ヲ宣明セル我國現下ノ情勢ハ非常重大ノ時機ト称スヘシ 此ノ秋ニ方リ簡明ニシテ正確ナル大満洲国全圖ノ公刊セ

ラレタルハ寔ニ時機ニ適シタルモノニシテ同胞ヲシテ満洲国ニ対スル認識ヲ深くシ且時局ニ就テ関心ヲ大ナラシムル上ニ貢献スル所少ナカラサルモノアルヲ信ス

本圖ヲ中心トシテ学校ニ家庭ニ都市ニ農村ニ滿蒙開發ノ必要ヲ語り日滿提携ノ急務ヲ説クニ到ラバ邦家ノ為メ實ニ慶賀スヘク依テ一言ヲ述ヘ廣ク江湖ニ薦ムル所以ナリ<sup>12)</sup>

この地図が公刊された時期は昭和八年（一九三三）の國際連盟退直後と思われるが、この時期になると満州事変による国内の排外熱が沈静化し、陸軍は再び民衆の支持を得ようと考えた。その際に、荒木が持ち出したキーワードは「ソ連の脅威」であつた。地図を用いることで、国民に対して視覚的に日本と満州とソ連の位置関係を明瞭に伝えるねらいがあつた。地図を見ることによつて、国民は「ソ連の脅威」を身近に実感する機会を与えられたのである。

また、國際連盟に関しても、荒木は「アメリカは何故に國際連盟に參加しないか、歐羅巴を主としたる國際連盟に米國が加はる愚な話はない<sup>13)</sup>」として、ヨーロッパの列強国の利益のみを重視し、アジアを無視したものであると痛烈な非難をしている。

このように、荒木の対外観は列強国に対する脅威と反発心が入り交じつた様相を呈していた。そして、日本の軍隊が西洋の軍隊を模範として組織が作られたことから生じる弊害を挙げ、そもそも日本人の氣質が西洋のそれとは合わない指摘する。

元より御勅諭によりまして、精神、思想の統一はいたされて居りま

すが、(中略)その制度運用の精神といふものはやゝもいたしませんと、範を欧国に取りました為に、殊に陸軍は最初に於て仏蘭西に取り、次で独逸に取りました為に多分に独逸の心持ちが日本の陸軍に織込まれて居るのであります。(中略)

独逸人の考へて居ります事組織的になりますことによつて、日本人のやうに鋭く敏な、殊に思想的なことに働き易い日本人にはそこに機械化せられてそこにじつとして居られないのであります。これは拉丁民族とよく似たところがありまして、非常に心持が自由である。非常に活躍したい、またして居ります物に機械化して、機械的に行かない、独断々々で行く頭が働きますから、規則を作りますと、それを潜りたいたい、法律を作りますとそれを活かしますよう、それを潜つて行つて、然かもその法律を無視する。日本人ほど規則を潜つて、それに拠れないものはないと申します。<sup>14)</sup>

荒木は日本人の気質を「思想的」で「機械的に行かない」と評しており、ドイツのような組織的軍隊を組むことに適していないと判断していた。そのため、日本人が「思想的」で規則に縛られないのであれば、「天皇を奉じる」という「思想的」な縛りを与えればよいと荒木は考えていたのである。

これらの言説の分析から見えてくる荒木の思想から、とくに「皇軍」というキーワードを頻繁に使用し理由を見出すとすれば、①「天皇に奉じる」という統一意識をもつことで軍隊秩序を再構築する、②ソ連の脅威(左翼思想への警戒心が背景に存在していた)、③日本人に「天皇を奉じる」という「思想的」縛りを与える、という三つの要点が浮かび上が

つてくる。とくに、③にある日本人の「思想的」縛りは、現代日本にも未だに色濃く存在している概念である。荒木が天皇権威を利用することで、陸軍内の統率を図り、さらには国民意識の統合を企図していたことがうかがい知れる。

## (二)「神がかり的」イメージの形成

荒木は陸軍のなかでも随一の雄弁家であり、講演活動も盛んで、かつ著作も多数出版するなど、いわゆる陸軍のスポークスマン的な存在であった。しかし、荒木の言説について、一般的に「神がかり的」なイメージがもたれており、「皇道派の首領」荒木貞夫」といった図式を生み出す要因にもつながった。そして、荒木に同調した軍人たちを「皇道派」という派閥で捉え、彼らも「神がかり的」に同調した軍人というレッテルが貼られていった。

この「神がかり的」な見方を問題視したのが、政治思想学者の丸山眞男である。丸山は昭和二十一年(一九四六)に発表した「超国家主義の論理と心理」において、「八紘為宇」的スローガンを頭からデマゴギーと決めてかからずに、そうした諸々の断片的な表現やその現実の発現形態を通じて底にひそむ共通の論理を探りあてる事が必要である」と述べており、「超国家主義にそのような公権的な基礎づけが欠けていたということは、それがイデオロギーとして強力でないという事にはならない」と主張する<sup>15)</sup>。事実、荒木の言説は一九三〇年代日本のイデオロギーの方向性を規定するとともに、国家総動員体制の時代に入ると、彼が提唱したスローガンが実現化していくことになる。荒木の言説には、丸山の言葉借りると、「国民の心的傾向なり行動なりを一定の溝に流し込むとこ

ろの心理的な強制力」が存在していたといえよう。<sup>(16)</sup>

### 三 陸軍新聞班制作トーキー「三月十日」

#### (一) 映画制作の政治的背景

満州事変をきっかけに、日本国内では軍事映画が多数制作されるようになる。映画制作の裏にある政治的背景としては、昭和七年（一九三二）十月にリットン報告書（日本の満州での軍事行動は認めない、満州国は日本の傀儡国家であるとの報告）が公表され、その内容に反発した日本が国際連盟の脱退に向けて動き出したことも影響している。陸軍は積極的に国際連盟の脱退を提唱するものの、一方では天皇をはじめとして、国際的孤立に対する懸念は深かった。そのような状況のなかで、荒木陸相が主導する陸軍は国民の支持を得るべく、娯楽文化を利用して国民世論の操作に乗り出そうと考えた。陸軍支持、国際連盟脱退への「国論」を盛り上げようと画策する陸軍は、自ら軍事トーキーを制作することになる。

#### (二) 荒木陸相出演の反響

国民的人気を誇る荒木の映画出演に関して、新聞等のメディアは期待感を込めてその報を伝えた。『読売新聞』昭和八年（一九三三）一月三十日夕刊では「非常時」を説く荒木陸相トーキーに」という見出しで次のように報じている。

「非常時」軍國時代のスター荒木陸相は廿九日の日曜を利用してス

タデイオ、首相官邸でトーキーに納まった、説くところは「非常時」に対する所感」数回やつてゐる演説なのでやり直しなんか一回もな  
く十分間ですらすらと済ませた。やがて全国津々浦々にこのトーキ  
ーが御目見得する筈。<sup>(17)</sup>

この映画は三月十日の陸軍記念日に全国各地で催す記念講演会で上映する目的で制作された。記念講演会で映画を上映する理由としては、将校派遣の負担を軽減し、且つ効率的に国防思想を普及したいという思惑が働いたものと思われる。

三月十日陸軍記念日には各地の記念講演會に陸軍より将校を派遣してゐたが、将校の數に限りがあつて遠隔の地にまで廣汎に派遣することが出来ぬところから今度陸軍省では荒木陸相を始め主なる将星の講演をトーキーに納め、その中に地圖と音楽を巧みに織り込んで非常な効果的なものを製作して「三月十日」と題して各方面に頒布する。<sup>(18)</sup>

将校の派遣を抑えて映画上映を行うことで、全国各地で多数の記念講演會を催すことが可能になり、さらには映画の画像や音響効果を利用することで鑑賞者の視覚、聴覚に直接的に訴えることができるメリットも生まれた。新聞紙上でしか見ることがなかった荒木の姿を、国民は映画という映像媒体を通じて身近に感じる機会を得た。荒木の風貌、動作、肉声に触れることは国民にとって非常に大きなインパクトがあつたといえよう。



(三)「三月十日」の内容について

「三月十日」は監督を鈴木重吉<sup>19</sup>、制作指導を陸軍省新聞班の松井貞二大佐が担当した。内容は全三巻からなり、第一巻は陸相演説(満州の重要性)と日露戦争にいたるまでの経緯説明、第二巻は旅順・奉天攻撃、第三巻は奉天陥落後の経過と満州の重要性、陸相演説(皇国理想)といった構成になっている。「三月十日」の台本は東京大学の近代日本法政史料センターに、映画フィルムは東京国立近代美術館フィルムセンターに所蔵されており、放映時間は約三十分となっている<sup>20</sup>。

では、「三月十日」の台本内容について検討していく。まず、第一巻の台本冒頭において、この映画の制作意図として次のような解説がなされている。

三月十日陸軍記念日。即ち明治三十八年三月十日、日露戦争の時に日本軍が奉天を占領した日。その記念日に当って、非常時日本の国民に、その当時の有様を示し、又想起させて、自覚させる為に、日露戦役の原因及びその経過を始めより終りまで、線画及び実写にて説明したものである。荒木陸軍大臣は演説によりて日本国民に対し激励の辞を述べられてゐる<sup>21</sup>。

陸軍記念日(奉天会戦に勝利した日)に日露戦争に関する映画を上映することで、日本国民に当時の記憶を想起させ、ロシアに対する敵対心を呼び起こさせる意図が垣間見られる。昭和八年(一九三三)当時は、日露戦争からまだ二九年しか経過しておらず、戦争の記憶が生々しく残っている時期である。先ほどの説明の後、荒木が登場し、演説を開始する。

陸軍記念日を迎ふるに當りまして私は全国同胞諸君と共に此意義ある記念日を祝福致したいと存じます、扱て内外共に重大なるこの時局に直面致しまして静に往事を顧み将来を考へまする時に我々は益々拳国一致以て皇国精神の発揚に努むべきことを痛感致するのであります 想うに満州の地に於ては嘗て我が先輩が幾多生霊と国帑とを犠牲として東洋平和の確立に戦ひ来つた我等の聖地であります、今や此の地に我国と此精神理想を同じうする満州国が建設せられ漸く東洋の天地に一大光明を認め得るに致つたことは何たる我等の幸福であります

回顧すれば満州事変勃発して惰眠の警鐘一度響き渡るや同胞は起つて一丸となり外には万歳を叫びつゝ鮮血もて戦場の白雪を深むる勇士あれば内には己を空しうして外征の傷兵を慰恤激励する銃後の後援があり今尚東洋の平和確立皇国精神発揚の熱血燃へつゝある事は天下周知の通りであります 之を往年の日露戦役時代の国民の意気と熱意とに較ぶれば毫も遜色なく否より以上のものがあると考へられます

斯くて事ある毎に炳として光輝を発する大和魂は依然として全国民の心底に健在しあるを知り同胞諸士と欣懐惜く能はざる次第であります

然し乍ら吾人の此の一大聖業完成の為には前途尚内外幾多の艱難の横はるを覚へ国民は茲に更に一層真剣なる覚悟を要するものがあると信ずるのであります

三月十日 此の日こそは曾て同じ理想の下に皇国の運命を賭せし奉

天戦に於て戦況最も有利に進展せし日であります<sup>(22)</sup>

荒木が演説において一番強調するのは「満州」というキーワードである。満州は日露戦争で「殉国」した人々の魂が眠る聖地であり、その地に、満州国が成立したことは東洋の平和につながるのだと主張する。さらには、満州事変を「一大聖業完成の為」の一步だとし、荒木は国民に「更に一層真剣なる覚悟」を求めていく。荒木による演説の後、映画は日露戦争勃発までの経緯解説に場面を移す。

地図を拡げますれば我国は朝鮮半島に中腹部を制せられ国防上これが他国の侵略に帰しましたならば我国が危険に瀕しますことは一見明瞭でありませう。明治二十七八年日清戦役はこれが為めに起つたのであります。その結果朝鮮の独立は保全せられ遼東半島は賠償として我国に譲渡されたのであります。

当時ロシアは歐洲の進出に失敗しそれを東亜に求めて居ましたのでドイツ、フランスを説いて三国干渉の形で東洋平和の名の許に遼東半島の還附を求めました。

之に對し我國の有様は當時屈服の止むを得ない状態にありましたので遂に恨をのんで還附するに至つたのであります。ロシアの野望は直に現はれまして満州を朝鮮にまで……こゝに我国も自衛上黙視する能はず屢々満州よりの撤兵履行を要求しましたが彼に実行の誠意なく却て益々兵力を増し軍備を拡大して我を威嚇しますので第十六回目の交渉を最後に遂に国交を断絶するに至りました<sup>(23)</sup>

この解説には、明治二十八年（二八九五）の三国干渉による屈辱を觀覽者に想起させる内容が含まれており、ロシアと日本による長年の確執、東洋の平和を脅かす存在としてのロシア（ソ連）を印象付けようとしている。第一巻を小括すると、①ロシアに対する敵対心の想起（三国干渉での屈辱、東洋平和を脅かす存在としてのロシア）、②満州国成立の正当性（東洋平和、英霊が眠る土地）という点が強調されている。そして、満州事変を「一大聖業完成の為」の第一歩と示唆している点は、とくに注目されねばならない。

第二巻では、日露戦争の戦闘過程について実写フィルムを中心とした内容になっており、記録映画としての要素が強い。実際の戦地を記録した映像を流すことにより、日露戦争に対するリアリティを想起させるねらいがあるものと思われる。第三巻では、なぜ満州が日本にとって思い入れが深い土地であるのか、その理由が解説されており、終盤には、次のような字幕テロップが流れる。

我が國威を發揚し日露戦役は終る世界を震駭させた

だが——しかし

満洲には

120000

十二万人の英靈

120000

十二万人の忠魂

120000

記憶せよ

120000

忘れるな

眠つてゐる

眠つてゐる聖地

想起せよ!!

(第一巻の荒木陸相演説が再び流れる―引用者注)

非常時日本!<sup>(24)</sup>

満州は十二万人の英霊が眠る「聖地」であると表現し、執拗に字幕で「120000」を連呼すること、鑑賞者に対して満州国成立の正当性を訴えた内容になっている。そして、第一巻の荒木陸相演説が再び流れることで、国威発揚の重要性がより強く訴えられ、「非常時日本!」という文言が観覧者の心理に強く印象付けられる構成になっている。第三巻の結び部分において、再び荒木が登場し、最後の演説が展開される。

茲に想を二十八年の昔に馳せて上 皇室の稜威を仰ぎ奉り 下地下に眠れる先人及同僚の英霊に対してその感激の涙を新にし今後一層其心身に鞭ちて 難局打開の一途に遭遇せん事を誓ふものであります 而して此の歳「皇紀二千五百九十三年」を以て我皇国理想進展の為将又東洋平和確立の為堅実なる基礎の年たらしむるこそ我等非常時国民の任務であり又今日を寿ぐ唯一の意義であると信する次第であります。実に同胞諸君の覚悟と健在とを祈ります<sup>(25)</sup>

この演説から「満州」というキーワードを一転し、皇室の権威を持

ち出した内容へと論調が変化していく。天皇権威を背景に「国論」を陸軍側に引きつけようとする意図が感じられる演説である。さらに「皇紀二千五百九十三年」と、神武紀元を持ち出し、「我皇国理想進展の為将又東洋平和確立の為」という国家目標を暗に提示し、「同胞諸君の覚悟」を促している点は、のちの「八紘一宇」を想起させる内容となっている。

映画のエンディングは軍歌『皇軍の歌』(作詞 徳富蘇峰・佐々木信綱、作曲 東京音楽学校)が流れ、「旭日煌々太平洋に、白雪千古不尽の嶺に、萬世一系天佑渥き、わが皇室をわが国を、擁護し奉れる皇は天皇躬づから統率し給ふ。わが皇軍わが皇軍は日本の護」という歌が流れてこの映画は終幕する。

第三巻で強調されている箇所は第一巻のそれと共通点が多い。国際連盟脱退問題が背景にあるため、満州国成立の正当性を主張すること、それに加えて、天皇権威を振りかざすことで陸軍に対する国民支持を強くアピールする内容になっている。

陸軍新聞班が企画・制作した映画「三月十日」の台本内容を検討してみた。これらの作業から浮かび上がってきたのは、第一に、当時の陸軍、とくに荒木が抱いている対ソ戦観である。荒木は陸軍随一のロシア通であるが、彼が一貫してソ連を敵視しつづける心理的背景として、日露戦争とシベリア出兵での苦い経験、日本国内における「赤化」の脅威が影響しているものと考えられる。荒木の深層心理にあるソ連への畏怖心が、「ソ連の脅威」を執拗に主張する動機へとつながったのではないだろうか。<sup>(26)</sup>

第二には、「非常時」継続、ひいては軍事予算の増大を目指すため、ソ連の脅威とともに、「皇室の稜威を仰ぎ奉り」「地下に眠れる先人及同僚の英霊」という対句が登場している点である。「天皇」と「英霊」という

批判を許さない存在を持ち出すことによって、陸軍の要求を正当化させる意味合いも含まれていた。

第三には、「一大聖業完成の為」という、なお曖昧な形ながら「国家目標」を提示することによって、日中全面戦争下で国是とされていく「八紘一宇」への第一歩が記された点であろう。「一大聖業完成の為」に「国民の覚悟」を促している点は、注目されねばならない。

おわりに

陸軍の「総意」として陸軍大臣に就任した荒木は、その風貌と雄弁な語り口調によって国民の人気を集めた。しかし、荒木人気は必ずしも強固であったわけではない。昭和七年（一九三二）春頃、大阪で荒木が演説会を行った時の反響を紹介しよう。

当時大阪で、陸軍大臣も「ロシア撃つべし」といふが如き口吻で大演説をやつたため、各方面に相当な反響——といふよりも寧ろ非難の聲が非常に高かつた。或は非難といふより呆れてものが言へないといふやうな感じが一般にしてゐたらしい。更に「当時まだ満洲のこともその緒に就くか就かない内に、すぐもうとびこえてロシアを撃たうといふ実に乱暴極まる議論である」とか、「非常識も甚だしい、相手にできん」とかいふやうな空気も、随分あつた。更にまた陸軍部内にも、これに対して「乱暴なことを言ふ」と感じた者が相当にあつたらしく、或る意味からいへば、陸軍大臣自身の鼎の軽重を問はれた感もなきにしもあらずである。<sup>28</sup>

これは、原田熊雄が荒木の演説に関する風評を聞いて、所感を述べたものである。やや史料批判の必要はあれ、荒木が執拗に対ソ戦の必要性を連呼するのに対して、聴衆はもとより、陸軍内部からも批判が相次いだことを示唆している。荒木が具体的根拠を示さずに「ソ連の脅威」を強調する背景には、荒木自身が経験したロシアでの苦難が心理的に影響していたことはいまでもない。しかし、それ以上に影響を与えたのは、対ソ戦を唱えることで陸軍の軍事予算を拡大させようという荒木の思惑であつた。対ソ戦をアピールすることで、政府を牽制し、世論を軍事費拡大支持へと向けさせようとしたのである。しかし先の原田が述べるような状況もあり、軍事予算についても、陸軍軍事官僚が期待したほどの拡大は実現しなかつた。

これに加えて、荒木が陸軍大臣就任後に行つた人事は陸軍中堅幕僚たちの反感を買う結果を招いた。派閥的な色がないと思われていた荒木による、自分と比較的親しい軍人の重用、隊附青年将校への配慮などが、彼らに次第に不満を抱かせたのであつた。陸軍の「総意」として期待された荒木の陸軍大臣就任であつたが、以上のようなことが引き金となり、陸軍内でわかに人気が増し始めるのである。

しかし、荒木の人気が増すとはいへ、陸軍内では宇垣勢力に対する反発が根強く存在しており、それらに対峙しうる人物として荒木は引き続き、陸軍の顔として表舞台に立ち続けた。昭和七年（一九三二）の五一五事件によって犬養内閣が倒閣した際、次の陸軍大臣を誰にするのかといった話が水面下で進められていた時の挿話は、この点を示唆している。

荒木陸軍大臣自身は責任を痛感して、辞意を固めてゐたけれども、その決心の中には幾分か南大将その他に対する一種の反感もあり、また多少捨鉢にもなつて、「貴様等にやれるものならやつてみる」と言はんばかりの気持もあつたやうにも思はれる。それでもしこの際、荒木が大臣を辞めると、どうしても不純な連中に動かされた不純な後任者が出てくる（中略）。

元來、陸軍のやうな大きな組織の下に、大臣なり次官が自己の抱負を経緯を行はうとするならば、少くとも一年以上はその職にゐてみないとよく判らない。それで陸軍の中堅は、あまり野心の多かつた宇垣大将や南大将の如きは歓迎しないで、寧ろ純な荒木中將によつて統制を復させたい、といふ気持が強かつた。そこで林大将によく話して、大臣就任を辞退させたい、といふ空気が生じたわけだ。

これは、鈴木貞一中佐が原田熊雄に陸軍内での話し合いの様子を伝えたものである。鈴木は、ここで荒木が辞めてしまうと、「不純な」宇垣の影響を受けた」後継者が陸軍大臣の地位についてしまう可能性があると示唆しており、陸軍中堅幕僚たちは引き続き荒木を担ぐことによつて陸軍の統制を図りたいという意向を示していた。そして、荒木の後任として陸軍大臣に据えられる人物が陸軍内にいなかったという事情も、荒木が陸軍大臣に留任する一つの理由であつた点は否定できない。

さらに荒木の国民的人気や、天皇、さらには「英霊」という批判を許さない存在を背後にちらつかせるような言説は、他の政治勢力の批判をかわすためにも極めて有効であつた。そして、「一大聖業完成の為」とい

う「国家目標」の提示は、陸軍のその後の進路をさえ暗示するものであつたといえよう。

〔注〕

(1) 田中は民衆世論の影響力をいち早く重要視し、陸軍に反発する勢力を押しさえ込む政治・社会体制を構築することを目指していく。そして、自身が抱く「総力戦国家」構想の体現化を推進すべく、軍部と国民の迎合性に着目するのである。在郷軍人会の設立、国防思想普及運動の展開、本稿では触れないが、陸軍省新聞班の設置に関しても田中の尽力によるものが大きい。田中が作り上げた総力戦国家への道筋は、軍ファシズム思想の萌芽にもつながつていったともいえよう。

(2) 原田熊雄述『西園寺公と政局 第二卷』（岩波書店、昭和二十五年）七〇八頁、昭和六年七月十六日口述

(3) 同右。

(4) 大正十三年（一九二四）に設立された国家主義政治結社。機関誌『国本』『国本新聞』等を発行していた。

(5) 前掲『西園寺公と政局 第二卷』一〇七頁、昭和六年十月二十九日口述。

(6) 同右、一六三頁、昭和七年一月十二日口述。

(7) 同右、二二六頁、昭和七年三月九日口述。

(8) 第六師団司令部「教育資料第二号 皇軍意識の透徹に就て」昭和五年四月十二日（東京大学大学院法学政治学研究所附属近代日本法政史料センター原資料部所蔵「荒木貞夫関係文書」）。

(9) 須崎慎一『二・二六事件―青年将校の意識と心理―』（吉川弘文館、平成十五年）一九〜二四頁。

(10) 前掲、「教育資料第二号 皇軍意識の透徹に就て」。

(11) 荒木貞夫「靖国神社奉納ラジオ体操の会「激励の辞」昭和七年七月二十一日

- (東京大学大学院法学政治学研究科附属 近代日本法政史料センター 原資料部 所蔵「荒木貞夫関係文書」)。
- (12) 荒木貞夫「満洲国地図公刊に際して」昭和八年カ(東京大学大学院法学政治学研究科附属 近代日本法政史料センター 原資料部所蔵「荒木貞夫関係文書」)。
- (13) 荒木貞夫「講演下書原稿 皇軍の使命」昭和八年カ(東京大学大学院法学政治学研究科附属 近代日本法政史料センター 原資料部所蔵「荒木貞夫関係文書」)。
- (14) 同右。
- (15) 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」(『増補版 現代政治の思想と行動』未來社、昭和三十九年)一一〜一二頁。
- (16) 同右。
- (17) 『読売新聞』昭和八年一月三十日夕刊。
- (18) 同右、昭和八年二月九日付朝刊。
- (19) 鈴木重吉は、明治大学経済学部卒業後、大正十二年松竹入社、昭和五年帝国キネマで監督した「何が彼女をさうさせたか」がヒットして、日本映画界に傾向映画ブームをもたらした。
- (20) 「三月十日」の映画フィルムは、アメリカ議会図書館から昭和四十二年(一九六七)から平成元年(一九八九)にかけて返還されたもの一つである。
- (21) 陸軍省新聞班「陸軍省指導制作トーカー」三月十日「昭和八年(東京大学大学院法学政治学研究科附属 近代日本法政史料センター 原資料部所蔵「荒木貞夫関係文書」)。
- (22) 同右。
- (23) 同右。
- (24) 同右。
- (25) 同右。
- (26) 同右。

- (27) 陸軍がソ連を強く意識する要因として、帝国国防方針のしがらみが存在していたことも指摘できよう。陸軍の仮想敵国であるソ連の脅威を訴えることは、陸海軍の軍事予算獲得のための駆け引きの手段であり、そのような政治的側面も影響したと考えられる。
- (28) 前掲、『西園寺公と政局 第二巻』二七三頁、昭和七年五月三日口述。
- (29) 同右、二九五頁、昭和七年五月二十五日付。

#### 著者プロフィール

林 美和(はやし・みわ) 昭和五十三年 長崎県生まれ。  
 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。  
 現在、長崎歴史文化博物館 研究グループ 研究員。  
 共著『軍港都市史研究Ⅲ 呉編』清文堂出版、平成二十六年。  
 論文『戦艦「大和」表象がもたらしたもの―大和ミュージアムにみる博物館コンセプトの変容―』『日本史研究』六、二九号、平成二十七年。「軍港都市史における海軍受容」『年報日本現代史』十七号、平成二十四年。「一九三三年における陸軍中枢体制の変容―満井佐吉少佐問題をめぐる政治的波紋―』『年報日本現代史』十一号、平成十八年。